ギニア音楽の「近代化」

あるグリオ一族の歴史から

鈴 木 裕 之

諸行無常。

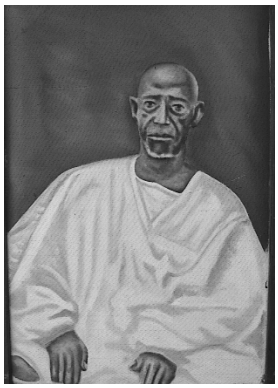
昨年の８月，ギニアの内陸都市カンカンに１カ月ほど滞在した私の脳裏に浮かんだ言葉である。この世に変化しないものはない。ギニアの首都コナクリやアビジャンを見れば一目瞭然。絶えざる社会変化にさらされた人々のエネルギーが大波となって押しよせてくる。

カンカンはコンクリート製の近代的建物と円形の伝統的家屋が混在する地方都市。電気もほとんど供給されず，水道よりも井戸の利用率のほうが高く，コナクリやアビジャンの喧騒にくらべれば静かそのもの。だがここにも着実に社会変化の波が押しよせている。私はあるグリオの名門一家の歴史を調べるうちに，その一家を襲ったある変化に気づくことになった。それは音楽に関するものであるが，彼らの社会全体が現在経験しつつある「何か」を象徴しているような，そんな変化であった。

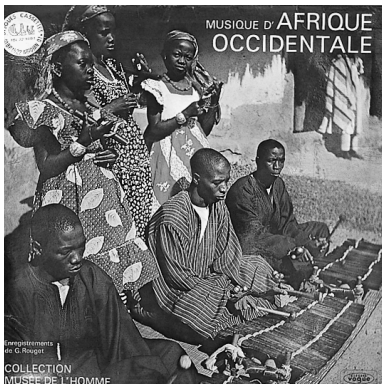
1　シディドゥの歴史

カンカンはマニンカ族（＝マレンケ族。ギニアでは「マニンカ」と呼ばれる）の中心都市。他のマンデ系諸族と同じく，彼らの社会ではグリオ（マンデ系諸語で「ジェリ」と呼ばれる）が重要な役割を果たす。カンカンのグリオの中でも名門中の名門としてまず名を挙げられるのが「シディドゥ」である。

シディドゥは19世紀末に現マリのカイ地方からカンカン近郊の村にやってきたシディ・ジャバテに起源を持つ。彼は優秀なグリオであり優れたバラフォン（木琴）奏者であった（ジャバテ姓はクヤテ姓とならぶグリオの代表的家系）。その長男ママディ・ジャバテも父に負けないほどの評判をとり，ママディの長男シディ・ジャバテの代にはさらにグリオとしての名声を高めていった（マンデのグリオは原則として世襲制）。やがてカンカンではシディ（ママディの息子のほう）に対し「街なかに住んでほしい」という要請が高まり，ついに土地をもらって近郊の村から一家を挙げて引っ越してくることになった。こうしてシディ・ジャバテ一族が住むようになった場所は「シディドゥ」と呼ばれるようになる。「シディの地」という意味である。シディ・ジャバテは現在その子孫たちから敬意を



←ンベンバ・シディの肖像



三兄弟の演奏は1952年にフランスの民族音楽学者により録音・レコード化された。前列左より，シディ・ママディ，シディ・カラモ，シディ・ムサ。

込めて「ンベンバ・シディ」（わが祖先シディ）と呼ばれている。以下，マリのカイ地方からやってきた彼の祖父と区別するため，彼をンベンバ・シディと表記することにしよう。

シディドゥに居住したのは，原則としてンベンバ・シディの拡大家族，つまり家長としての彼，総計10人の妻，その子供たちである。妻が10人といっても，これは一度に10人というわけではなく，妻の死去，離縁などの諸事情を含めたうえでの総計である。ただマンデは父系制なので，子供はすべて父方に属すことになる。

ンベンバ・シディはバラフォンの名手，妻たちは歌の達人。その演奏は評判となり，命名式，結婚式などに引っぱりだこの日々。彼の子供たちからも優秀な演奏家が育つ。グリオといっても全員が演奏家になるわけではない。それぞれの素質を見極めながら親が音楽的指導を施すものの，ある者はトラックの運転手になり，ある者は美容師になり……そして音楽的才能のある者がいわゆるグリオとして活躍するのである。シディドゥにおいてはとくに第三夫人の子供たちの活躍がめざましく，優秀なバラフォン奏者であった長男のシディ・ママディ，次男のシディ・カラモ，三男のシディ・ムサがンベンバ・シディの後継者と見なされ，この三兄弟が父親とともにシディドゥの一時代を築くことになる。

ンベンバ・シディがギニアの独立直後にこの世を去ると，三兄弟がシディドゥをしょって立つことになった。独立後のギニアではセク・トゥレ大統領の推進する文化政策の中で国内各地に伝統音楽合奏団が結成されるが，三兄弟はカンカン伝統音楽合奏団の中心メンバーとして活躍するのである。

2　バラフォンと精霊

現在のシディドゥにかつてのような活気はない。三兄弟を含めたンベンバ・シディの子供たちのほとんどがこの世を去り，孫たちもその多くはカンカンを離れてコナクリやアビジャン，あるいはパリに移住している。いまのシディドゥにおける最年長者はンベンバ・シディの第八夫人カンクゥ・クヤテ，他にンベンバ・シディの娘がひとり，息子の嫁が数人おり（夫はすでに死亡），自分の子供や孫たち（つまりンベンバ・シディの孫と曾孫）といっしょに暮らしている。

シディドゥの歴史を知るには，人生の盛りを過ぎたこの老女たちに尋ねるにかぎる。彼女たちは

かつての若き日々を思い起こしながら，一族の偉大なる歴史を雄弁に語ってくれる。ンベンバ・シディがいかに惚れ惚れするようないい男であったか，グリオとしていかに力を持っていたか，三兄弟がセク・トゥレ大統領のお気に入りで，その好意で何度もメッカ巡礼に行かせてもらったこと……そしていつもこう言うのだ。「ンベンバ•シディには精霊の友達がたくさんいたんだよ」。

バラフォンと精霊。これがンベンバ・シディの力の源泉であったという。彼はよくバラフォンを携えて近くの森にひとりで出かけていった。森から帰った彼が家の前に座ってバラフォンを奏でると，そこからはすばらしい新曲が流れだしたという。「精霊から曲を授かったのさ」。「いや，精霊は彼のバラフォンの音が好きなものだから近くにやってくるけど，曲はンベンバ・シディの作曲さ」。彼自身が精霊についてくわしいことを語らなかったため，老女たちのあいだに精霊と音楽の関係についての明確な認識はないようだが，「ンベンバ•シディが精霊とコンタクトをとっていた」ということは共通了解となっている。そしてそれがどんな精霊であったかということも。

精霊の種類は三種類。まずは背が低く髪の毛が長いコモクドゥニン。夜中，ンベンバ・シディが庭先に座ってひとりでバラフォンを叩きはじめると，たくさんのコモクドゥニンがやってきたという。つづいて背が高くのっぽで，移動するときは「キャー」という叫び声とともに天を駆けるというソロ。これはひとり（一匹？）だけのようである。最後は大蛇が一匹。これは精霊とはいえないかもしれないが，シディドゥの便所に住みつき，ンベンバ・シディとのあいだに神秘的な関係があったようである。大蛇以外の精霊は他の人々の眼にはけっして見えることはなかったが，その存在は誰もが「感じて」いたという。

ンベンバ・シディの死後，精霊たちとの関係は三兄弟に分散して引き継がれたという。ソロは長男シディ・ママディに，大蛇は次男シディ・カラモに，大勢いたコモクドゥニンは三兄弟それぞれがすこしずつ引き継いだようだ。なぜ精霊たちは三兄弟のもとに現れたのか。それはもちろん彼らがバラフォンの名手であったからだ。「いいかい，忘れちゃあいけないよ。精霊はバラフォンの音が好きだったんだ」。そう私に念を押したのは，ンベンバ・シディのかつての愛妻カンクゥ・クヤテであった。

3　姿を消した精霊たち

やがてシディドゥから精霊たちが姿を消すことになる。バラフォンでその名をとどろかせたシディドゥであったが，ンベンバ・シディの孫の世代にはバラフォン奏者がついに現れず，三兄弟がつぎつぎにこの世を去ると同時にバラフォンの技も途絶え，それに呼応するかのように精霊がシディドゥを訪れることもなくなったという。なぜ三兄弟の次の世代にバラフォンは引き継がれなかったのであろうか。それは独立を境にギニアを襲った社会変化，とくにセク・トゥレ大統領の文化政策に影響を受けたためである。

フランスによる植民地時代，グリオの活動はそのハード面においてはおおきな変化をこうむることはなかった。コラやバラフォンなどのいわゆる伝統楽器による演奏は，植民地化以前から続く音楽活動の延長線上にあったと言える。やがてアコースティック・ギターが普及し，マンデのグリオの中にもギターを手にする者が現れはじめる。だが西洋式の音楽理論と接触する機会のなかった彼らは，和音をギターで奏でるのではなく，バラフォンなど伝統楽器で使われる音の配列パターンを

そのまま模して演奏していた。こうしてギターという新しい楽器は彼らの演奏スタイルにおおきな影響を及ぼすのではなく（もちろん若干の変化はもたらしたものの），むしろ彼らの楽器ヴァリエーションのひとつに組みこまれていった。

1958年のギニア独立とともに状況は変化する。セク・トゥレの主導した文化政策が音楽のあり方をおおきく変えていったのだ。グリオたちは通常の活動をおこなう傍ら，各地に結成された伝統音楽合奏団に組みこまれ，演奏により大統領個人とその政策理念を賛美する役割を果たす。この流れの中でカンカン伝統音楽合奏団の主要メンバーとなったシディドゥの三兄弟は，セク・トゥレのお気に入りとなる。また近代的な電気楽器および西洋の管楽器を使ったポピュラー音楽のバンドが結成された。こうしたバンドは独立以前から首都コナクリに存在していたが，セク・トゥレ大統領は国内各地においてバンドを結成させ，外来音楽の演奏を禁止し，ギニアの伝統音楽をアレンジして演奏することを義務づけた。カンカンでもバンドが結成され若者の憧れの的となってゆくが，この若者たちこそンベンバ・シディの孫の世代に当たるのだった。

カンカンのバンドは＜ホロヤ・バンド＞と命名され，その創立メンバーにはンベンバ・シディの息子カビネ・ジャバテがリード・ギタリストとして参加していた。ホロヤ・バンドの演奏能力は高く評価され，隔年でおこなわれた国民芸術文化祭のコンクールで数度の優勝を経て1971年に国立バンドに格上げされ，本拠地をコナクリに移していった。ポピュラー音楽バンドはセク・トゥレの文化政策におけるまさに花形であり，レコードやコンサートを通して海外にも進出していったのである。

こうした変化はシディドゥの若者たち，つまりンベンバ・シディの孫たちの楽器選択にダイレクトに反映されてゆく。もはやバラフォンを手にする者はいない。シディ・ママディの長男はエレキ・ベースを習得し，アビジャンに移住してポピュラー音楽のバンドで活躍した。シディ・カラモの長男はやはりベーシストとなるが，国立バンドとなったホロヤ・バンドの後釜としてカンカンに結成された＜22バンド＞の歌手となる。音楽家の道を選んだ者のほとんどはポピュラー音楽のバンドに活動の場を求め，ギタリストとして，あるいはベーシストとして活躍。楽器を演奏しない女性は歌手としてその才能を発揮し，パリで活躍するジャンカ・ジャバテ，コナクリでナンバー・ワンの人気を誇るウム・ジュバテ（ジュバテとジャバテは同じ姓）など，シディドゥ出身の女性歌手の活躍には眼を見張るものがある。

シディ・カラモの長男シディ。手にはセク・トゥレ時代に発表された〈22バンド〉のレコード・ジャケット。

4　近代化の一側面？

コナクリやパリで活躍するシディドゥ出身の音楽家たちの華麗な世界。それにくらべると，現在のシディドゥは抜け殻同然だ。偉大なるグリオ，ンベンバ・シディのバラフォンが鳴り響いた庭先。

もはやそこに精霊がやってくることはない。セク・トゥレ大統領を感激させたあの三兄弟のバラフォンも，すべて消失してしまった。

かつてのシディドゥにおいて，音楽は彼らの重層的な世界を包容する場であった。それは眼に見える世界と眼に見えない世界が，物質的世界と精神的世界が，この世とあの世が交叉する場であった。老婆たちの語るバラフォンと精霊との結びつきは，まさにそのことを表象しているのだろう。だが急激な社会変化によって，このふたつの世界は引き離されてしまう。セク・トゥレの文化政策において，彼らの音楽はナショナリズム昂揚のための政治的道具として利用される。こうして社会状況が変化しても，独立前に音楽を身につけた三兄弟の存在が精霊たちをシディドゥに引き留めていた。やがてセク・トゥレが死亡し，ギニア音楽はショウ・ビジネスの時代に突入。つまり金になるヒット曲の生産が至上命令となるスター・システムの到来だ。こうして精霊の居る場所は完全になくなってしまう。

これを別の言葉で「近代化」というのだろうか。シディドゥから姿を消したバラフォンもまだまだギニア各地で演奏されている。とりわけ「近代化」の遅れた村にゆけば。そこでは大勢の精霊たちに遭うこともできるだろう。いっぽう近代化の進んだシディドゥでは，老婆たちは嘆き，孫たちは弱肉強食のショウ・ビジネス界での生き残りにしのぎを削る。

（すずき・ひろゆき／国士舘大学）